

平成14年度全国ソフトバレー・レディ - ス&メンズ 交流大会における江南チームの勝敗について

脇坂 康彦

On a Study of Results of Konan Teams at the 2002 National Women and Men
Softvolleyball Competition

Yasuhiko Wakisaka

1. はじめに

ソフトバレーボールは、高齢者から小学生までの幅広い年齢層で全国的に普及発展を遂げている。それは、ボールが柔らかく、ボールのスピードが遅いためラリーが続きやすく、又、コートが狭く、4人でのローテーションを採用しているためにボールに触れる回数が多く、等しくプレーができるチャンスが用意されているなど、だれもが親しみやすい生涯スポーツとしての要素を兼ね備えているからである。

現在数多く行われている試合形式は、男女を入れた「トリムの部」、大人とこどもの「ファミリーの部」、又、女性のための「レディースの部」や小学生を対象とした「小学生の部」が盛んに開催されている。^{(1) pp. 8-9}

本研究は、平成13年度から開催が始まった男性4人で行われる「メンズの部」に着目し、平成14年度に開催された全国ソフトバレー交流大会における「メンズの部」の江南チームを対象として、対戦チームとの勝敗の要因について分析・検討した。

この大会は、全国より36チームが参加し、4チームずつ9組に分かれて予選リーグを行い、その組の1位の9チームが3チームずつ3組に分かれて決勝リーグを行い、その組の中で江南が1位となったので、この戦跡を振り返り、勝敗の要因について分析を試みた。又、発表に至るまでに、レフェリーの有益な助言に紙面上であります。感謝致します。

2. 方法

1日目の予選3試合と、2日目の決勝リーグ2試合をビデオテープに収録し、スコアシートを用いて試合内容を記述する方式で行った。すべての送球は、サーブ、サーブレシーブ、スパ

イク、ブロック、ラリー後の取得得点、イーザーミスの6ポイントに分類し集計した。特に、ブロックのオーバーネットはスパイクのポイントとせず、ミスとしてカウントした。

又、表1は、表2から6までの用語の説明であり、

表1

返球率 (サブリーグがセッターに正確に返された平均値) ○正確、×不正確	
決定率 (サブリーグ後の1本目のスパイクの決定平均値) ○成功、×不成功	
ラリー得点率 (ラリーにおける得点の平均値) △1本目の攻撃が決まらず、ラリーになったパターン。	
SP P	スパイクポイント
B P	ブロックポイント
S P	サーブポイント
sp M	スパイクミス
B M	ブロックミス (オーバーネットによる失点)
S M	サーブミス
E M	その他のミス (レシーブやトスのミス)

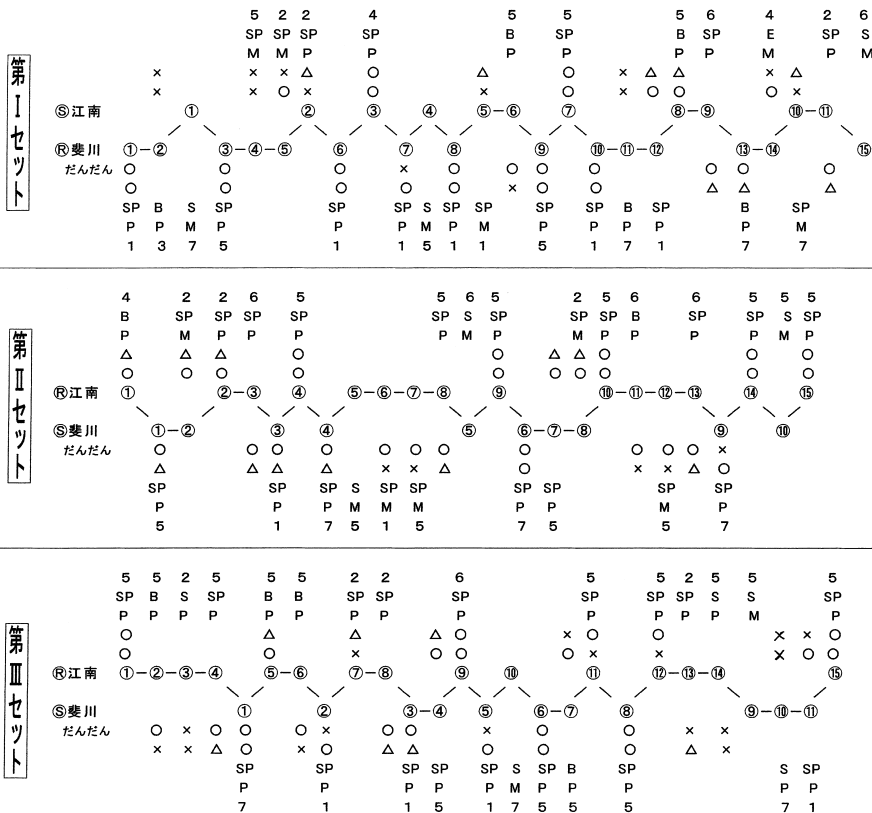


図1

表2から6は、図1から5までの試合パターンの比率を集計したものである。

3. 結果

図1は江南と斐川だんだんのスコアシートである。～は得点を表し、得点に近いと×はサーブレシーブがセッターに正確に返球されたか否かを表し、次の×は、1本目のアタックが決定したか否かを表し、はラリーになったことを表している。

又、図の一番上の段と、一番下の段の数字は、選手の背番号を表したものである。

第1セットを見ると、斐川チームのサーブレシーブの正確性がよくわかる。又、10点まではサーブレシーブからの攻撃がほとんど決まり、リズムに乗った斐川は、14点までは常にリードし、最後は江南のサーブミスで15点目を獲得した。

2セット目になると、1セット目にサーブレシーブの返球率が50%だった江南が100%セッターに返るようになってきている。一方斐川は、1セット目と同じく正確にサーブレシーブが上がっているが、1本目のスパイク決定率が急に悪くなり、5点から7点までは自チームのミスで江南に点を献上しており、江南のリズムを良くしてしまい、最後は江南の正確なサーブレシーブによる攻撃で15点目を獲得された。

第3セットは、両チームともにサーブレシーブの返球率は50%以上であったが、ゲームが始まってからの1点から8点までの江南のブロックやスパイクが決まり、完全にリズムが江南にあり、斐川は10点と11点をサーブとスパイクで獲得したが、最後は江南のスパイクが決まり、2対1で江南の勝利となった。

表2から両チームを比較してみると、サーブレシーブからの攻撃の決定率と、ラリーが続いた後の得点率が江南の方が上回っていたことが勝敗の分かれ目となったことが読み取れた。

次に、2試合目の夕月との比較であるが、図2をみるとセットのすべり出しは江南がスパイクとブロックで

3対0と走っているが、8点まで行くと江南のサーブレシーブが乱れ、一気に追いつかれ、その後、1点を争うゲーム展開となったが、江南がスパイクミスとブロックミスが重なり、最後

表2

1 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江南	12-6(50%)	12-2(18%)	8-6(75%)	5	2	0	2	0	1	1
斐川	11-10(91%)	11-7(64%)	8-2(25%)	8	3	0	2	0	2	0

2 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江南	10-10(100%)	10-5(50%)	11-5(45%)	9	2	0	2	0	2	0
斐川	12-11(92%)	12-2(18%)	11-6(55%)	6	0	0	3	0	1	0

3 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江南	11-7(64%)	11-5(45%)	7-5(71%)	9	3	2	0	0	1	0
斐川	13-8(62%)	13-5(38%)	7-2(29%)	8	1	1	0	0	1	0

はスパイクミスで1セットを落とすこととなった。

このセットは、江南のミスが7本もあり、自滅の感があった。

第2セット目は、夕月の1本目のスパイクが決まらなくなり、ラリーが多くなっている。しかし、江南はスパイクミスとブロックミスが重なり14対10までいった。普通の試合ではこれで江南が負けるところであったが、夕月の3番がブロックポイントを上げ完全に夕月の勝利であった。ところが、そのブロックがオーバーネットをしており、夕月は勝ったと思って大喜びをしたのがその判定を受け集中力が一気になくなり、その後サーブレシーブが上がらなくなり、ラリーとなり、全て江南のスパイクとブロックが決まり、あと1点が取れずに江南が勝利をする事となった。このセットで、1点を取る事のむずかしさを再確認することができた。

第3セット目は、夕月がスタートからサーブレシーブが乱れ、5対0となった。それは、2セット目に破れたショックが大きく、集中力が出なくなったために、何でもないミスを立て続けに2本も出していることから推察された。その後、江南がブロックミスとスパイクミスを犯し、7対4となるが、夕月がまたもレシーブミスとスパイクミスを犯し、11対5となり、終

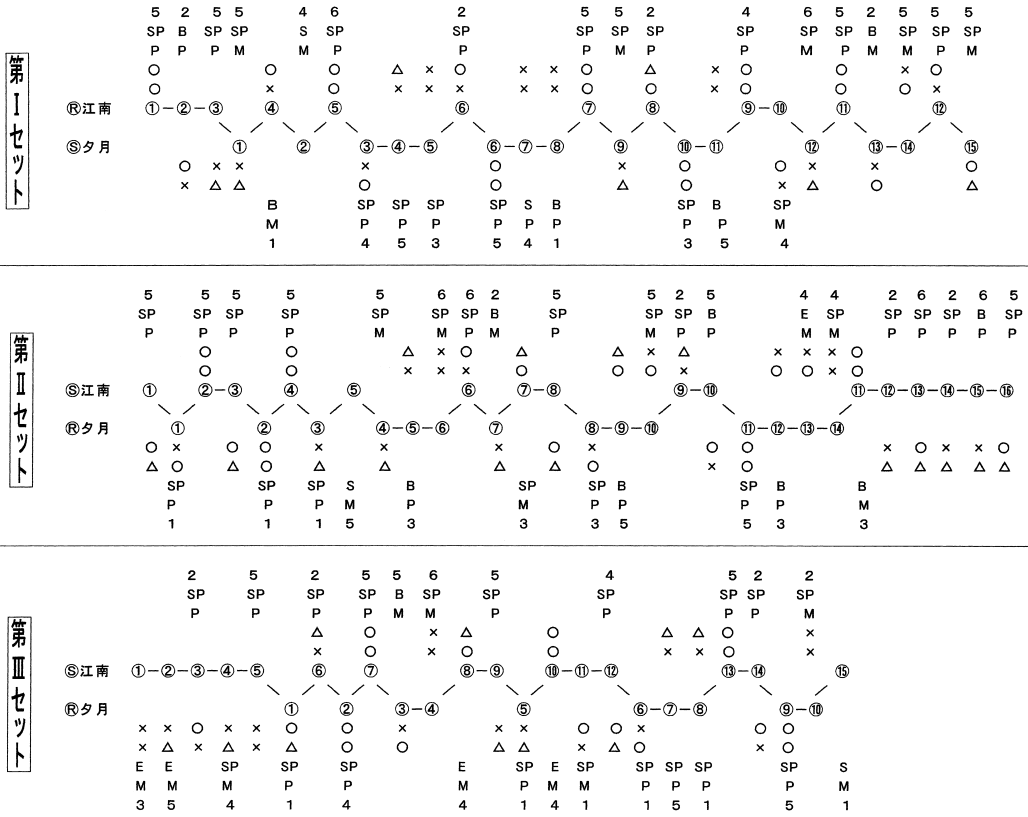


図 2

盤で夕月がスパイクポイントを連続で3本取ったが、最後は夕月がサーブミスを犯し、江南が2対1で勝利を手に入れた試合であった。

表3から両チームを比較してみると、サーブレシーブの返球率は3セットを通して両チームが並んでいるが、ラリー得点率を見ると、両チームとも獲得したセットの平均が上がっていることが読み取ることができる。

又、江南のスパイクミスが多いことで夕月も助かっているが、それを上回るスパイクポイントがあったがゆえに、江南に勝利が傾いたのである。しかし、2セット目のブロックによるオーバーネットの

反則がなかったならば、江南の勝利はなかった

ので、大変ラッキーであったことが言える。
次に、第3試合目の栗橋との比較である。図3の1セット目をみると、栗橋

表 3

1 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江 南	15-7(47%)	15-8(53%)	7-2(29%)	9	1	0	5	1	1	0
夕 月	11-5(45%)	11-4(36%)	7-5(71%)	5	2	1	1	1	0	0

2 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江 南	13-8(62%)	13-4(31%)	15-10(67%)	11	2	0	4	1	0	1
夕 月	16-8(50%)	16-4(25%)	15-5(33%)	5	3	0	1	1	1	0

3 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	SP M	B M	S M	E M
江 南	9-4(44%)	9-3(33%)	10-6(60%)	8	0	0	2	1	0	0
夕 月	15-7(47%)	15-4(27%)	10-4(40%)	7	0	0	2	0	1	4

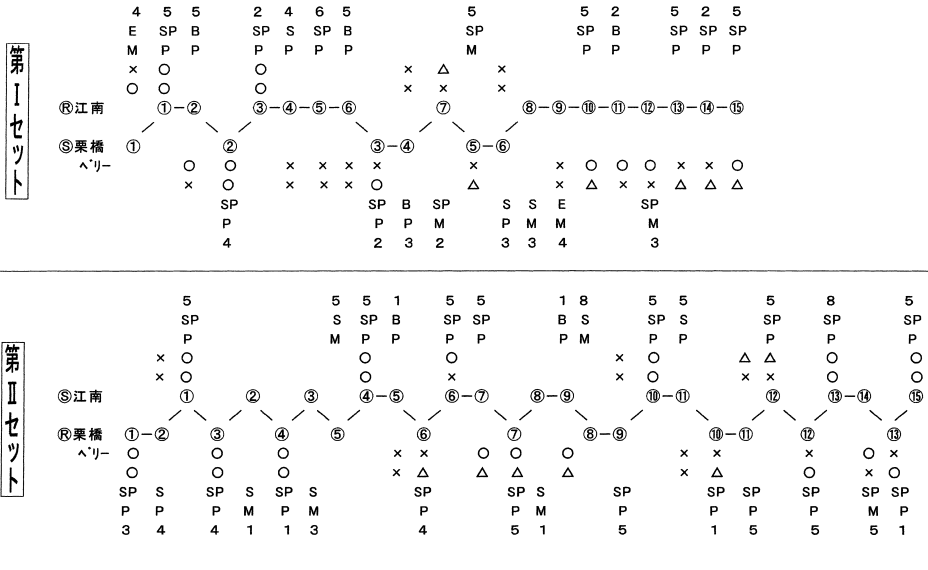


図 3

のサーブレシーブからの1本目の攻撃の決定力の低さが読み取れる。その低さが江南に連続ポイントを許し、中盤のスパイクミスや、サーブミスが重なり、リズムに乗れずにセットを失ったことが読み取れる。又、終盤のラリーにおいて、全て江南に得点されていることは、ブロック力も低いことが影響したのではないと思われる。

2セット目をみると、両チームともに1点を争う緊迫したゲーム展開となっている。

これは、江南が1セット目とちがうメンバーを3人も出してきたために、栗橋と力関係が互角になったことによるゲーム展開となったものである。しかし、栗橋は前半にサーブミスを1点おきに繰り返したためリズムに乗れず、それに輪をかけてせっかくサーブレシーブが悪くなった所でスパイクの決定力が不足しており、ラリーが続いても連続して得点を取ることが出来なかったことが敗因となったものである。特に終盤の11対10からは、1点ごとに両チームのスパイクが決まり、もう少しで栗橋が追い付きそうになった時に5番のスパイクミスが出て、14対12となり、せっかく1番が13点目をスパイ

表4

1 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
江 南	6-3(50%)	6-2(33%)	6-5(83%)	7	3	1	1	0	0	1
栗 橋	14-6(43%)	14-2(14%)	6-1(17%)	2	1	1	2	0	1	1

2 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	SP P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
江 南	10-5(50%)	10-6(60%)	7-3(43%)	8	2	1	0	0	2	0
栗 橋	13-7(54%)	13-5(38%)	7-4(57%)	10	0	1	1	0	3	0

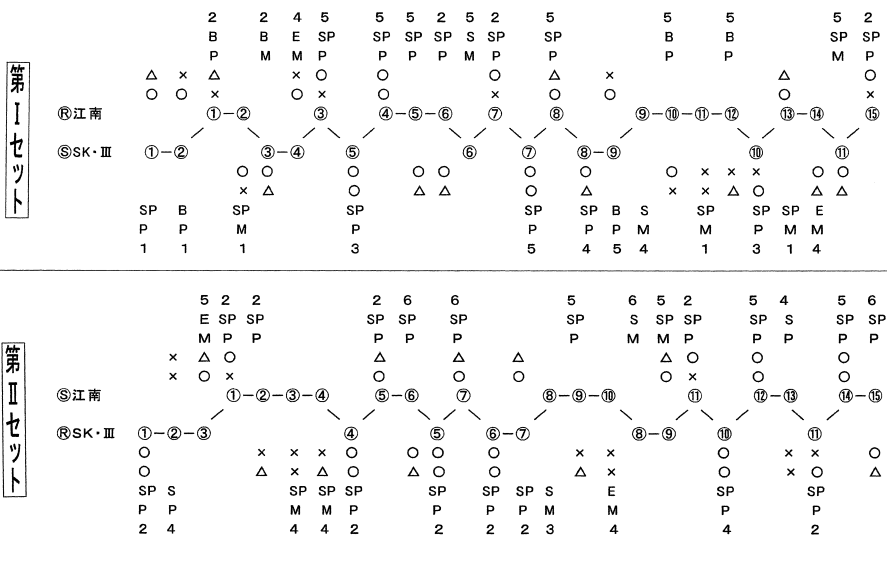


図4

クでもぎ取ったところ、最後は江南の正確なサーブレシーブとスパイクで15対13という僅差の内容で試合を終えることとなった。

表4から両チームを比較してみると、1セット目に比べ、栗橋のサーブレシーブの返球率と、ラリー得点率が上がったことが読み取れる。

又、スパイクポイントが江南より上回っているのに、サーブミスが3本あり、ミスポイントが江南が2点。栗橋が4点の2点差が勝敗を分けることとなった。栗橋としては、このサーブミスがなかったならば、1セットを取れていたものと思われる。

次に、2日目の決勝リーグの1試合目であるSK・との比較である。

1セット目を見ると、SK・はサーブレシーブがかなり良いことがうかがわれる。しかし、1本目のスパイクの決定率が悪く、ラリーが続いていることがわかる。その為に、中盤までは江南のブロックミスやサーブミスが所々で現れており、SK・と互角のゲーム展開となっている。しかし、9点目以後にSK・がサーブミスやスパイクミスを重ね、江南に連続ポイントを許すこととなり、自滅の形で負けが決定している。

2セット目をみると、SK・はスパイクポイントと、サーブポイントで3対0と一気に走るかと思われたが逆にスパイクミスを繰り返し、江南に連続ポイントを許し4対3となっている。その後、両チームとも要所所でサーブミスやスパイクミスを交互に繰り返して13対11となったが、最後は江南のスパイクが決まり2対0で勝敗が決することとなった。

表5から両チームを比較してみると、SK・は1セット目に関しては江南よりもサーブレシーブの返球率が高いことがわかる。又、1本目の決定率は両チームともあまり変わらないが、ラリー得点率で江南と倍近い差が出ているのがわかった。又、2セット目になると、サーブレシーブの返球率が江南の方が上回り、ラリー得点率はやはり倍の差が出ていることがわかり、さらに言えることは、江南は、前日の試合に比べてこの試合に関してはスパイクミスが大幅に減っていることがわかった。このことは大変重要で、ミスが少なくなることで余裕が生まれ、落ちついてプレーが出てきたと思われる。

次に、2試合目のかがわとの比較である。

第1セット目の江南をみると、4点から9点目までに連続6ポイント獲得していることがわかる。この間か

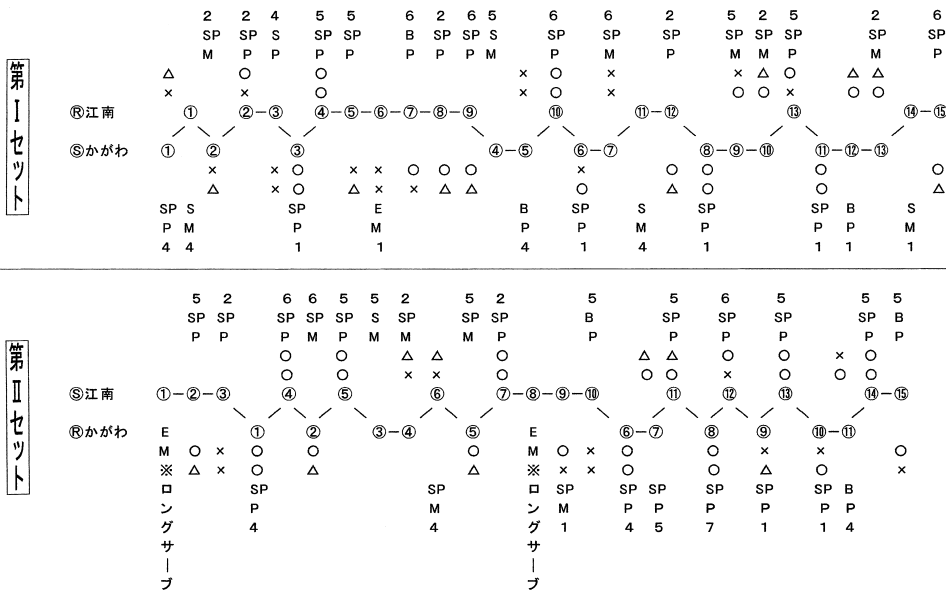
がわは、サーブレシーブからの攻撃が決まらずに、ラリーに持ち込まれポイントを失っていることがわかる。ここで一気にリ

表5

1 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	sp P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
江 南	11-7(63%)	11-4(36%)	11-7(64%)	7	3	0	1	1	1	1
S K III	13-10(77%)	13-3(23%)	11-4(36%)	5	2	0	3	0	1	1

2 S T	返球率	決定率	ラリー得点率	sp P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
江 南	10-7(70%)	10-4(40%)	10-7(70%)	10	0	1	1	0	1	1
S K III	14-7(50%)	14-6(43%)	10-3(30%)	6	1	1	2	0	1	1

江南チームの勝敗



※初めてのメンバーがいたためサーブ順のまちがいがあった。

図 5

ズムに乗るかと思ったら、サーブミスと、かがわのブロックポイントで流れが変わり、終盤では少なくなっていたスパイクミスが4本も出て13対13とかがわに追いつかれてしまった。ここでかがわはリズムに乗り一気にセットを取りたかったところでサーブミスを犯してしまい、最後はサーブレシーブはセッターに正確に返球されたのだが、攻撃が決まらずに江南の6番にスパイクを決められ1セット目を失ってしまった。大事な場面でのミスは命取りであることが悔んでも悔み切れないものである。

次に2セット目をみると、かがわは最初からサーブ順の間違いを犯し、本来は1点取っていたところを間違いがわかった時点で、それまでの得点を失うこととなった。

これは、1セット目の選手と交替した選手がサーブレシーブからの攻撃が決まった時点で、1つ先に自分の位置を進めなければならなかったのに、そのままサーブを打ち、その後記録員が気付き反則となったものである。その反則を5対7の時点で、サーブレシーブからの攻撃が決まり、6対7となった所でまたもやサーブ順の間違いによる反則を犯し、5対8となったことは、大会に向けての練習が少なかったのかもわからないが、チームにとっては大きな誤算であったと思われる。この後、スパイクミスと江南のブロックポイントで10対5まで引き離されたが、もう1度気を引き締めて1点を争うゲームとなったが最後は江南の5番のスパイクポイントとブロックポイントにより2対0で江南の勝利となった。

表6から両チームを比較してみると、1セット目は、サーブレシーブの返球率も、1本目の

スパイクの決定率も、ラリー得点率も両チームともにほとんど同じである。そこでスパイク部門をみると、江南はポイントは多いけれども、

表 6

1 S T				sp P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
	返球率	決定率	ラリー得点率							
江南	11-6(55%)	11-4(36%)	10-5(50%)	9	1	1	5	0	1	0
かがわ	13-8(62%)	13-4(31%)	10-5(50%)	5	2	0	0	0	3	1

2 S T				sp P	B P	S P	sp M	B M	S M	E M
	返球率	決定率	ラリー得点率							
江南	11-8(73%)	11-6(55%)	8-3(38%)	9	2	0	3	0	1	0
かがわ	12-8(67%)	12-4(33%)	8-5(63%)	6	1	0	2	0	0	2

ミスが5ポイントあり、このことがゲームのリズムをつかめないままに混戦にもつれ込んだ原因であったと思われる。

又、2セット目をみると、両チームともサーブレシーブの返球率が上がり、ラリー得点率はかがわの方が上回っていることがわかる。もしかして、前半と中盤のサーブ順の反則がなかったならば、かがわは、このセットを取っていたかもしれないと思われた。

4. 考察とまとめ

以上の分析から、江南と他チームを比較して次のようにまとめることができる。

- 1) サーブレシーブのセッターに対する返球率は、必ずしも他チームに比べて飛び抜けて高くはなかったが、2セット目になると安定性が増し、スパイク決定率が向上していた。
- 2) サーブレシーブからの1本目の攻撃が他チームに比べて勝っていた。
- 3) ラリーになった時の得点率が他チームに比べ勝っていた。
- 4) スパイクポイントが他チームよりも多かったが、スパイクミスも多かった。

以上が他チームと比べて数字に現れてきた結果であるが、他チームがサーブレシーブの時にセッターを前後で2枚に分けているチームが多かったのに対して、江南はワンセッターで、ランニングセッター制を用いてサーブレシーブからの攻撃に結び付けていたことが、2)のサーブレシーブからの攻撃が他チームに比べ勝った点であると思われる。

これは、特にサーブレシーブがセッターに正確に返らなかった場合に、セッター専門のメンバーがいるといないとでは、1度死んだ球を生きたトスにできるかできないかで大きな違いができるからである。又、バックトスは大変むずかしく、様々なコンビネーションプレーができるか否かで、得点率が変わってくるからである。幸いに、江南のチームには、中学校から大学までセッターを経験したプレーヤーが2人もいたことで、ワンセッターシステムを用いることができたのである。

1)のサーブレシーブのセッターに対する返球率は、特に、全国大会に出るチームには、大きく変化するサーブを打つ選手が多く、なかなかレシーブしにくいものであるが、1セットを

通して受けていると、だんだんなれてきて、2セット目には楽にレシーブできる選手がそろっていたことがスパイクの決定率を向上させたと思われる。

3)のラリーになった時に他のチームに比べ得点率が勝っていた点は、セッター以外の他の選手の二段トスの正確さが得点率の高さにつながったものと思われる。その為には、二段トスを打ちこなせる選手がレフトとライトに必ず1人ずついないと得点に結びつかず、特にライトを受け持つ選手が、両手のどちらからでも打つことができ、そのことで相手のチームがブロックしにくくなり得点に結びついたことも大きな要因になったものと思われる。

4)のスパイクミスも多かった点は、あえてブロックアウトを狙わずに、コースに打ち分けてアタックを決めようとした場面が多くみられたことが、ミスにつながった点であると思われる。

5. おわりに

筆者は、バレーボールを38年間経験し、3年前よりソフトバレーボールを本格的に始めたのだが、通常使っているバレーボールは硬いので、自分の思い通りにコントロールすることができるが、ソフトバレーボールは大きくて柔らかいので、ボールの中心をはずれると、特にスパイクにおいては非常にコントロールがむずかしい競技である。

又、コートもバドミントンのコートを使用する為に非常に狭いので、よほど正確にボールをコントロールしないと得点に結びつかないことを経験した。

もとより、レクリエーションとしての人の結び付きと、楽しんで競技できることを主眼に置いたスポーツなので、自分の体力の維持と、地域のコミュニケーションをはかるためにも、今後とも続けていきたいと思うものである。

又、この楽しさを授業に生かし、学生のストレスの発散にも寄与できればと思う次第である。

引用文献

(1)日本ソフトバレーボール連盟(編者代表:豊田 博):ソフトバレー・ハンドブック,大修館書店(1998).

〒483 - 8086 愛知県江南市
高屋町大松原172番地
愛知江南短期大学
現代幼児学科